

令和 4 年 5 月 20 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12922

研究課題名（和文）都市社会学と労働社会学の分野間分業の再検討：調査票原票の再分析を中心に

研究課題名（英文）Reconsidering the division of labour between urban and industrial sociology:
Re-analysis of original sheets of surveys

研究代表者

武岡 暢 (TAKEOKA, Toru)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：90783374

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：都市社会学と労働社会学の分野間分業について検討するにあたり、画期として注目すべきは1950年代の諸研究である。それ以前は必ずしも明確でなかった分業体制が、1950年代以降は各連字符社会学の確立とともに明確化してくる。そうした分業体制の成立過程を跡付けるにあたり重要な作品として、本研究では中野卓『商家同族団の研究』と、尾高邦雄『職業社会学』を取り上げた。学問において下位分野が発達することは健全な発展のプロセスであるとも言えるが、同時に、そうした棲み分けにおいて取りこぼされるテーマがあらわれるという問題がある。本研究はそうした問題を歴史的に研究したものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

格差や不平等といった現代社会の喫緊の課題に対して、社会学という学問もまた精力的に解明の努力を続けている。そのなかで「職業」という概念は、格差や不平等が世代を超えて再生産される際に重要な役割を果たすものであると考えられている。しかしながらこの概念についての検討はあまり進んでいない。本研究は社会学において職業という概念が用いられなくなっていった過程について、特に都市社会学と労働社会学のあいだの分業プロセスを調べることでアプローチしたものである。

研究成果の概要（英文）：In examining the division of labor between urban sociology and sociology of work, the 1950s are notable as a landmark period. The division of labor, which had not necessarily been clear prior to the 1950s, became clearer with the establishment of sociology in the 1950s and thereafter. In this study, we have taken up Takashi Nakano's "A Study of Merchant Family Groups" and Kunio Odaka's "Sociology of Occupation" as important works in tracing the process of establishment of such a division of labor system. The development of sub-disciplines in academia can be said to be a healthy process of advancement, but at the same time, there is the problem that some themes are left out of such segregation. This study was a historical study of such a problem.

研究分野：社会学

キーワード：職業 尾高邦雄 連字符社会学 労働

1. 研究開始当初の背景

連字符社会学とも呼ばれる様々な下位分野の成立は、類似の関心をもつ社会学者同士の議論を容易にすると同時に、研究関心を固定化させ、重要ではあるが取り上げられづらい「すき間領域」を生み出してしまふ弊害がある。研究者は誰からも強制されることなく自由に研究テーマを選択することが可能なはずなのに、なぜ、いかにしてそうしたすき間領域が発生してきたのか。

とりわけ本研究が目撃したのは「都市/地域社会学」と「産業/労働社会学」という2つの下位分野である。例えば初期シカゴ学派のモノグラフはこれら2つの分野にまたがるようなテーマ設定をしていたものが少なくない。その後20世紀の終わり頃から、都市社会学においてはその住民中心主義が、労働社会学においては雇用労働中心主義が、それぞれ批判され始める。実はこれらの批判においてその主題化が求められていたイシューこそ、両分野の分野間分業において取りこぼされてしまった問題なのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「都市/地域社会学」と「労働/産業社会学」の分野間分業の成立過程を跡づけることで、現在の分業体制の狭間で取り上げられなくなってしまった重要な「すき間」領域を、どのような方法で対象化していけるのか、その方途を探ることである。

住民中心主義から排除されているのは、さまざまな職業の空間である。商店街やオフィス街、倉庫街や繁華街など、非住民が主体となるような地域空間について、都市/地域社会学は相対的に等閑視してきた。このことは、労働/産業社会学における(大企業の)雇用労働中心主義と表裏一体の関係にある。つまり、これらの社会学は男性稼ぎ手モデルの家族を標準として、共犯的に「住民—被雇用者」に焦点を当ててきたのだ。

3. 研究の方法

そこで本研究では1950年前後の、分野間分業成立にとって画期となる、あるいは分業体制にとって重要な意義を有すると思われる諸研究や研究者について集中的に検討する方法を採用した。

4. 研究成果

(1) 尾高邦雄の職業社会学構想の検討

尾高邦雄の職業社会学構想の検討は本研究の成果の中核を成す。「職業」は近代社会を構成する重要な要素のひとつと見なされながらも、集中的にその検討が行われてきたとは必ずしも言えない。そうした状況のなかで例外的に職業を主題として取り上げたのが戦前の尾高邦雄であり、尾高による職業社会学構想であった。よく知られているように尾高は戦後、産業社会学や労働社会学といった領域名を掲げ、戦前の職業社会学の枠組みをほとんど引き継がなかった。しかしながら本研究によって明らかになったように、尾高の職業社会学構想には今日においても見るべき点が多くある。尾高は初めて行ったフィールド調査である植民地調査を通じて、理論的にも方法的にも職業社会学を放棄していくことになった。

都市社会学と労働社会学の分野間分業において「すき間」領域として等閑視されることになってしまったのがまさにこの「職業」というテーマであった。それはおおむね戦前期までにおいては都市的問題としても、労働に関する問題としても、いずれのアプローチも可能な、しかも近代社会にとって重要な問題系を構成するテーマとなるはずであった。しかしながら戦前におけるその概念化は未だ経験的調査との接合が十分ではなく、戦後に流入したアメリカ型の計量社会学やより「科学的」なフィールド調査の陰で散逸してしまうことになる試みであった。

そうした戦後の学の展開において職業に代わって台頭してきたのが「労働」概念であり、尾高が取り組んでいく「階層」概念であった。

(2) 労働概念と関連現象についてのレビュー

(A) 失業と「反生産」論

失業状態があぶり出すのは「就業」状態の相対性である。もっとも、それは常にそうであるわけではなく、失業が就業への強迫を強化する場合も少なくない。とりわけ日雇い労働の世界では人びとが「労働者」として他者からレイベリングされるのみならず、本人たちがまさにその労働に誇りを抱き、アイデンティティのよりどころとする場合が少なくない。ところが日雇い労働は産業の労働力需要の変動に応じて不安定な就労とならざるを得ず、社会全体で産業構造が変動すれば、半恒常的な失業を余儀なくされる。ここに見られるのは、就労を支援しようとするような周囲と本人の就労意志が、社会状況に応じて逆機能的に働く可能性である。

(B) 被差別部落と職業差別

被差別部落に関連した社会学研究は少なくないが、関連した職業差別や特定の職業(食肉、皮革産業等)が部落民によって担われる実態やその問題に関する研究は多くない。こうした研究を中心的に担ってきたのは八木正であるが、八木の調査研究は十全に成果が発信、公開、分析されているとは言いがたい。本研究では八木の研究成果について、自治体で所蔵されている調査報告書を含めてサーベイしたが、八木自身が系統立ってデータを公表したり研究成果を発表していないことが明らかになった。

(C)「まなざしの地獄」

見田宗介の「まなざしの地獄」に一挿話のように登場する「履歴書の要る仕事/要らない仕事」の区別は、上述(A)と(B)の問題をつなぎ、さらにその他の一見すると無関係な多様な論点をつなぎ合わせる意味でヒューリスティックな意義が認められる。それは日本独自のユニークかつ重要な概念化でありながら、その後かならずしも積極的に発展させられてこなかった、「居住立地限定階層」のような、「居住/労働/生活」が相互に関連し合った社会の位相を照射する可能性を持つものであった。本研究ではこうした可能性がかつて存在したことを発見・指摘したものであり、その可能性の活用については今後の研究が待たれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武岡暢
2. 発表標題 尾高邦雄の職業社会学構想の再検討 脱-労働中心主義の試み
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Toru Takeoka	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 444
3. 書名 The Routledge Companion to Gender and Japanese Culture	

1. 著者名 武岡暢	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文遊社	5. 総ページ数 384
3. 書名 変容する都市のゆくえ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------